

原発事故避難者が置かれた現実への理解 —避難者へのインタビュー調査から—

Understanding the situation Fukushima nuclear accident evacuees are in now
—a study based upon an interview survey—

澤上 知春*¹
Chiharu SAWAKAMI

小野 広明*²
Hiroaki ONO

I 問題

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。それに伴う福島第一原子力発電所の事故（以下「原発事故」と略す）により、多くの住民たちが避難を余儀なくされた。事故から9年以上経過した現在でも、大勢の避難者が福島県内外での避難生活を続けている。

避難者の状況をマスメディアが伝えることはあるが、私たちは避難者が置かれている現実をどれだけ理解しているのであろうか。実際、筆者の身近なところでも、原発事故による避難は遠い場所で起こった出来事であると自分と切り離し、避難者への関心が薄い人は少なくないように思われる。また、「事故から長い年月が経過したので避難者の心は癒えただろう」、「避難者は賠償金や公的支援を受けて生活再建に向かっているだろう」という声を耳にすることもある。しかし本当にそうだろうか。さらに、同じ福島県内でも避難者への偏見、差別・排除があるとも聞く。もしそうであるならば、これは避難者を苦しめ、避難生活を一層困難にしているのではないだろうか。

II 目的

避難者の心が癒され、生活を再建するための支

援を行うには、何よりもまず避難者の置かれた現実の理解に努めなければならない。そのためには、直接避難者から話を聴くことが必要である。

従来、心理臨床の研究領域においては、災害等による被災者への心的理解と心的援助に関する研究はなされてきたが、原発事故避難者に直接話を聴き、避難者の置かれている現実を明らかにした研究は少ない。

本研究は、東日本大震災発生時から現在まで避難者がどのような生活を送ってきたのか、差別や偏見を受けたことはあったのか、ふるさとを失うとはどういうことなのか、今後の生活をどのように考えているのか等について話を聴き、避難者の現実理解を深めることを目的とする。

III 方法

東日本大震災発生時、福島県浜通りに居住し、原発事故により避難指示を受けた5名を対象としたインタビュー調査を2018年に実施した。

対象者には、本研究の目的、個人情報の保護、インタビュー内容と録音媒体の適切な取扱いを説明してインタビューへの同意を得た。その上で対象者は「調査参加承諾書」に署名した。

対象者5名をA～Eと記号化し、そのプロフィールを表1に示す。なお、対象者の中で津波

*1 埼玉工業大学大学院人間社会研究科心理学専攻

*2 埼玉工業大学人間社会学部心理学科

表1 インタビュー対象者のプロフィール（インタビュー時）

I D	A	B	C	D	E
性別	男	女	男	男	女
年齢	76歳	73歳	76歳	92歳	68歳
職業	会社役員	無職	無職	無職	無職
震災時職業	会社役員	理容師	無職	無職	福祉系臨時職員
震災時居住地 (居住期間)	福島県浪江町 (68年間)	福島県浪江町 (66年間)	福島県浪江町 (69年間)	福島県檜葉町 (45年間)	福島県大熊町 (35年間)
居住地	茨城県鉾田市	福島県南相馬市	福島県南相馬市	同上	福島県郡山市

の被害を受けた者はいない。また、BとCは夫婦である。

表2にインタビュー対象者の避難先と期間を示す。A～Eの中で、最終的に震災時の自宅に戻ったのはDのみである。

表2 インタビュー対象者の避難先と期間

ID	A	B	C	D	E
避難先 (期間)	茨城県 娘夫婦宅	福島県南相馬市 親戚宅 (2.3日間)	福島県 いわき市 体育館 (2日間程)	福島県田村市 船引町 文化センター (数日間)	福島県田村市 三春町工場 (数日間)
	↓	↓	↓	↓	↓
	↓	新潟県体育館 (1か月間)	↓	↓	↓
	↓	↓	福島県 いわき市 親戚宅 (3日間程)	↓	↓
	↓	福島県二本松市体育館 (5日間)	↓	↓	↓
	↓	↓	山形県 親戚宅 (10日間程)	↓	↓
	↓	福島県二本松市旅館 (4か月間)	↓	↓	↓
	↓	↓	茨城県実家	↓	↓
	↓	福島県二本松市仮設住宅 (2017年10月まで)	↓	↓	↓
	↓	↓	↓	↓	↓
	娘夫婦宅敷地内 に新居を建てる (2013年から 現在まで)	福島県南相馬市に 中古住宅を購入 (2017年11月1日から現在まで)	避難解除後、早 い段階で福島県 檜葉町の自宅へ 戻る (2015年から 現在まで)	福島県郡山市 娘宅 (1か月)	福島県郡山市 借上げ住宅 (2013年から 現在まで)

質問は表3記載のとおり8項目行った。インタビュー内容は、K J法を用いて分析した。

Ⅳ 原発事故避難者の現実

インタビュー結果を質問Q1～Q8ごとに、K J法により表3のとおり、分析項目を整理した。

以下、項目ごとに避難者の現実を明らかにする。

表3 分析項目一覧

1 地震・原発事故発生時の心境と行動について (Q1関連)
(1) 大地震の恐怖
(2) 死が迫ってきた原発事故
ア 爆発の水蒸気を見た衝撃／終わりという意識
イ 安全な原発の想定外の事故
ウ 逃げ惑う人々
2 避難生活について (Q2関連)
(1) 温かい避難場所と冷たい避難場所
(2) 身内への気遣い・遠慮
(3) 避難先の祭りを見て涙する
(4) 避難生活の大変さ
ア 他人の見る目
イ 不便な避難先
ウ 心身の変調
エ 生活環境の変化
3 避難先での人間関係について (Q3関連)
(1) 避難生活中に受けた支援
ア 家族からの気遣い
イ 友人からの気遣い
ウ 近隣からの気遣い
エ 公的支援者からの気遣い
オ 遠隔地の中学生からの気遣い
(2) 避難生活中に受けた心無い言動
(3) 避難先で生きるための知恵
4 震災時居住地の現在について (Q4関連)
(1) 自宅の喪失
ア 現在の自宅の状態
イ 自宅を荒らす動物たち
(2) 故郷の喪失
ア 変わってしまった町の風景

イ	町民が消えた町
ウ	動物が住民になった町
エ	分断される故郷
(3)	震災後の故郷について
ア	変わってしまった故郷への無念さ
イ	故郷復興への懸念
5	帰郷について (Q 5 関連)
(1)	帰りたいが帰れない事情
(2)	家の解体と帰郷の諦め
(3)	妻の葬式のための帰郷
6	支援について (Q 6 関連)
(1)	自身が求める支援
(2)	避難者が求める支援
ア	安心して暮らせる住宅
イ	かけがえのない医療
ウ	話し相手がいること
(3)	避難先の周りの人に望むこと
ア	避難先での心無い言動—差別と排除の体験—
イ	普通の関係・暮らしを望む
ウ	近隣住民より遥かに親切的な店長と店員
7	原発事故について (Q 7 関連)
8	避難者にとってのふるさとについて (Q 8 関連)
(1)	離れがたいふるさと
(2)	有り難いふるさと
(3)	やりきれないふるさと
(4)	避難者以外の人にとってのふるさと
9	これからの人生—それでも生きていく— (Q 8 関連)

1 地震・原発事故発生時の心境と行動について

(1) 大地震の恐怖

大地震発生時、Aはとんでもない、経験のないことが起こると思った。Bは立って歩くこともできない大きな揺れに恐怖を感じた。飼っていたインコも驚き大騒ぎするほどであったという。Cは今までで一番大きな揺れに驚いた。Dは外出先の窓ガラスが割れ、立つことができないほど大きな揺れに恐怖を感じてその場で動けなくなった。Eも初めて体験する大きな揺れに驚き、恐怖を感じた。A～E全員が大地震の揺れに衝撃を受けたが、それだけでは終わらない現実が待っていた。

(2) 死が迫ってきた原発事故

A～Eは大地震の後にやってきた原発事故をど

のように受け止めたのか。

ア 爆発の水蒸気を見た衝撃／終わりという意識

Aは当時の恐怖を、生きていられるのかという言葉で語った。BとCは原発が爆発した際の水蒸気を直接目撃し、Cは、もう終わりだ、もう帰れないと思った。Dは原発事故に恐怖を感じた。Eは水素爆発の前に逃げたため被ばくは免れたのではないかと思った。A～Eは原発事故を知るや否や、切迫した状態に陥った。

イ 安全な原発の想定外の事故

B～Eは、原発は安全で事故など起こるはずがないと考えていた。事故は想定外の事態であった。

ウ 逃げ惑う人々

BとCの夫婦は、着の身着のまま親戚宅へ避難した際、車が何十キロも渋滞しているのを目撃した。避難する人々が山の方へ登って行くのも見えた。また、Dは逃げなければと無我夢中だったと語った。Bは、避難中、道に迷っていた時に案内してくれた人の名前を聞かなかったことを今でも後悔していると語る。非常時に親切にしてくれたことを大変有り難く思った。

逃げ惑う中で身内に対する心配も頭をよぎった。Bは、津波の救助に向かった息子とこの時から9日間連絡が取れなくなり心配した。また、Dは入院中の妻の安否を、Eは連絡の取れない身内の心配をした。

これらの内容から、逃げるのに精一杯であった人々の姿や、安否の確認が取れずに焦る姿が浮かび上がった。また、命に関わる非常時に人から親切にしてもらえることの有り難さが窺える。

2 避難生活について

(1) 温かい避難場所と冷たい避難場所

Bは、避難場所となった新潟県の体育館で手厚い支援を受けた。本当に親切にしてもらったと語った。部屋全体が暖かく、床には発泡スチロールの上に莫塵が敷いてあった。また、銭湯や買い

物へ行くためのバスが1時間ごとに出ていたことへの感謝もある。避難者にとって、暖かい環境は身体だけではなく心も温める。

一方、Eは冷たい避難場所について語った。最初の避難先であった文化センターの床は冷たく、人もすし詰め状態であった。段ボールを敷き、毛布を掛けて横になったが、とても眠れる状況ではなかった。次の避難先となった工場は屋根がついているだけいいと思わざるを得ない避難所であった。発泡スチロールの上にブルーシートが敷かれていたことにより床の冷たさは軽減されたが、布団とは違った。

寒く冷たい避難場所で、眠れない夜を過ごした避難者が大勢いた。寒い夜は、避難者をより心細くさせたであろう。

(2) 身内への気遣い・遠慮

Eは埼玉県と福島県に住む娘たちの元で避難生活を送ったが、娘たちに気兼ねする避難生活であったと語った。親としての気遣いや遠慮、申し訳なさを抱えながらの生活を送った。

避難先が身内であっても、安んじて生活を送ることができない現実もある。

(3) 避難先の祭りを見て涙する

Eは、福島県二本松市での避難生活中に見た提灯祭りと、参加者の若者たちに感動して元気ももたらしたと語った。これからの時代を担う若者たちを見てほろほろと涙がこぼれた。避難生活の中で目にした祭りには特別な思いが伴った。

(4) 避難生活の大変さ

A～Eは長期間の避難生活の大変さを語った。

A 他人の見る目

Bは避難先の人から「遊んでいていいな」という目で見られ、いじめにも遭ったと語った。避難生活の経緯を知らない人の眼差しは、誤解、誤謬の目であり、避難者を苦しめる。

イ 不便な避難先

Bは、浪江町の体育館（数時間の避難先であっ

たため表2には記載していない）ではトイレが詰まり、外に穴を掘りそこで用を足したと語った。トイレットペーパーもなく、ちり紙1枚がやっとであった。食糧もなく、空腹状態が続いた。Eが避難した船引町の文化センターでは、食糧の配給はおむすび1つ程度であった。トイレは大勢の人で溢れていた。避難者は、不衛生な排泄環境と食糧不足の生活を送らざるを得なかった。

ウ 心身の変調

Aはそのうち自宅に戻れるだろうという見通しを持ってなくなったため、熟睡できなかつたり寝つけなくなつたりした。Bは新潟県に避難した際、血圧が230まで上がり服薬するようになった。避難所に辿り着くまでは感覚が麻痺しており、自身の体調の変化に気づかなかつたのである。現在も精神安定剤や睡眠薬を処方してもらっているがなかなか眠れない。Cも新潟県に避難した時から、高血圧で服薬するようになった。避難後は寝つけなくなり睡眠時間が減った。不眠は現在も続いている。DとEも含め、避難後、全員が不眠に悩まされるようになった。避難生活は避難者の心身に変調をもたらした。

エ 生活環境の変化

Aは娘夫婦の車で避難したため、自身の車がなくて、娘夫婦の都合のよい時に運転を頼まなくてはならなかったことにストレスを感じたと語った。Cは避難後、人と話す機会が減り、行く所もなくほとんど家で過ごすような生活となった。浪江町では自分の畑があつたが畑仕事もできなくなった。Dは妻の入院する病院へ行くために以前は1時間もかからなかつたが、避難先からは高速道路を利用しても2時間以上かかるようになった。Cの避難先の新潟県は豪雪地帯であり、その後移動した二本松市でも雪が積もるため雪かきが大変であった。避難先で思うように動けない不自由さは、人との関わりや外出する機会の減少へと繋がった。

3 避難先での人間関係について

避難者は、対人関係の中でどのような対応を受けたのだろうか。

(1) 避難生活中に受けた支援

ア 家族からの気遣い

Aには、娘夫婦から受けた「絶対に無理しないでね」という親を気遣う言葉が心に残っている。食事でも今日は何を食べたいかとよく尋ねてくれた。Bは新潟県の体育館に避難していた時に、福島県に住む息子が毎週末会いに来てくれることが嬉しかった。Eは子どもたちからたくさんの励ましの言葉をもらった。

イ 友人からの気遣い

Cは趣味を通じて、離れ離れになった仲間とも再び繋がることができたことから、趣味があってよかったと感じている。Eは寂しい時、稽古事の仲間からの電話による気遣いが嬉しかった。会話のやり取りができたことにより元気づけられ、うつにならずに済んだと語っている。

ウ 近隣からの気遣い

Bは二本松市の仮設住宅で避難生活を送っていた時、地域の人々の配慮のある言動が有り難かった。その人たちとは今でも交流があるという。Cは近隣の農家の人と関わるようになり、畑の手伝いをすることができた。Eはアパートの大家に優しく接してもらったことに感謝している。現在の避難先である郡山市の近隣住民にも優しく接してもらい、ここに避難してよかった、自分は幸せ者で恵まれていると語った。

エ 公的支援者からの気遣い

Bは新潟県の避難所の担当者とも交流があり、現在でも小さい子ども3人を含む家族5人で泊まりに来てくれることに感謝している。Cも新潟県の体育館では親切にもらった。炊き出しのおかげで冷めた物を食べたことはなかった。また、病院が1つの区域に密集していたため、診療科ごと移動せずに済み、便利であった。

オ 遠隔地の中学生からの気遣い

Bは二本松市の仮設住宅での避難生活中に、兵庫県の中学生から「自分たちの住む所も過去に大きな地震があったので」という内容の手紙と飾り物が届き、励まされた。

ア～オから、家族の支えや人との繋がりが避難者にとってどれほど重要な意味を持つか読み取ることができる。

(2) 避難生活中に受けた心無い言動

しかし、避難者は温かい扱いばかりを受けたわけではない。偏見により、差別や排除の対象になることがある。Aは車を買って替えた時、避難先の住民から「賠償金をたくさんもらったからいい車に乗っているんでしょう」、「いいな」と言われた。Bは二本松市の病院の待合室で見知らぬ人から「銭もらって遊んでいていいね」と言われた(Bは、浪江町で苦労して得た家を捨てざるを得なかったのにそのように言われてショックが大きかったという)。Eは埼玉県に避難中、いわきナンバーを見た人から「気持ち悪い」と言われて堪えたと言った(「いわきナンバー」イコール放射能汚染地域の車という偏見)。心が痛んだが、言いたい人には言わせておけという気持ちもあったという。このように、賠償金をもらったことへの心無い言葉や、避難者をいわきナンバーというだけで差別する人が現実に存在する。

また、Cは陰では心無い言葉を発せられていると耳にすることはあるが、気にしないようにしていたと語った。Dは、友人が避難先で傷ついたことや差別発言を受けたことを聞いた。Eの知人は避難先で家建て、近隣住民に手ぬぐいなどを配ったが、翌日まとめて返された。近隣住民の対応に酷く傷つき、その後、他の地域へと転居した。Eは避難先で生活を送る上で、近隣住民の人の扱が重要であると語った。

(3) 避難先で生きるための知恵

筆者は、時間の経過に伴う周りの人の態度等の

変化の有無について質問した。Bは今でもお金をいっぱいもらっていいねと言われる時があるが気にしないようにしている。Cは自分が避難者であると噂になることを恐れ、余計なことは言わない。Eはなるべくよい方に考えるようにしている。避難者は、避難先で心無い言動に傷つけないために、気にしないこと、我慢すること、目立たないように生活を送ることを意識している。

4 震災時居住地の現在について

(1) 自宅の喪失

ア 現在の自宅の状態

A、B、Cはすでに家を解体した。Cは解体せざるを得ないことを情けなく思った。Dだけは、放射能の除染、ネズミの駆除、リフォームを行い、自宅に住んでいる。

イ 自宅を荒らす動物たち

A、B、Cの解体前の自宅はネズミに荒らされていた。Eの自宅もネズミによる糞が臭く、絨毯の掃除は、停電で掃除機を使えないため大変であった。Cは自宅付近で子連れの猪が、人を気にすることなく堂々と歩いている姿を数回目撃した。人が住まなくなると家は動物の世界に一変する。

(2) 故郷の喪失

ア 変わってしまった町の風景

BとCは、浪江町では多くの家が解体されたことで、Dは除染トラックで国道が混雑する光景を見て、町の風景が変わったことを各々寂しく思った。Bは家を解体したら浪江町に行く気力がなくなったという。

イ 町民が消えた町

Cは浪江町をたまに訪れるが、人はほとんど見かけない。Dは人が少なくなったが、除染作業員の住むアパートが増えたと語った。

ウ 動物が住民になった町

Aは2011年に浪江町を訪れた際、道路を歩く牛とそれに対応する警察官を目撃した。人間に向

かっていく牛は、エサをもらえなくなり、人間を恨んでいるかのように見えた。また、犬と猫とカラスと一緒に冷凍食品を仲良く食べていたという。彼らも生きるすべを知っていたのだと思った。犬と猫は痩せ細っており、首輪をしていたことから、飼い主と一緒に避難することができなかったのではないかと語った。また、猪を3回ほど見た。自宅の庭の栗の木には猿が栗を取りにやってきたが、人が見ていても気にしなかった。

エ 分断される故郷

浪江町は2013年4月の警戒区域再編後に「避難指示解除準備区域」「住居制限区域」「帰還困難区域」に3分割された。このことについて、AとBは1つの故郷がなぜ3分割されるのか納得できなかったと語った。

(3) 震災後の故郷について

ア 変わってしまった故郷への無念さ

Aは、変わり果てた故郷の姿にショックを受けたという。Bは、友人が遠くに避難し、付き合いができなくなってしまったことが辛いと語った。

イ 故郷復興への懸念

Bはどこまで故郷が復興できるのかという疑問を、Cは故郷の復興はほど遠いという懸念を口にした。賑わう故郷の町並みも友人の姿も今では目にする事ができない。その寂しさと、復興の難しさへの思いが伝わってきた。

5 帰郷について

(1) 帰りたいが帰れない事情

Aは故郷に帰りたいという気持ちがあったが、妻が病気のため、その望みはなくなったという。Eは原発の危険が完全になるまでは帰れない。避難者にとって帰郷は、かなえられないかも知れない難題である。

(2) 家の解体と帰郷の諦め

Cは帰郷を希望に仮設住宅で生活していたが、家を解体したことで帰りたいという気持ちが消え

た。家の喪失は帰郷への思いを変化させた。

(3) 妻の葬式のための帰郷

Dは避難生活中に入院中の妻の様態が悪くなり、妻が亡くなった場合には檜葉町の自宅から葬式に出してあげたいという強い気持ちがあった。帰郷は特別なとき以外はかなわない。

6 支援について

(1) 自身が求める支援

自身への支援を求める対象者は少なかった。Aは、1回でもボランティアなどのサポートを受けるとあてにになってしまう、足腰が立つうちは自立して自分の力で生活したい、人を助けても助けてもらうことはしたくないと語った。Bは自分たちでできているので大丈夫、Cは自身が求めているものはないとそれぞれ語った。

一方、支援を求める声もあった。Dは自宅に戻っているため、失ったものを取り戻せるような支援が必要であると語った。具体的には、医療と福祉、買い物へ行く場所、地域のコミュニティである。またDは、避難時には支援物資は欠かせないが、集団で避難している人への物資の提供が優先され、Dのように個別に避難している人への物資は不十分であったという。

(2) 避難者が求める支援

次に避難者全体が求める支援について聞いた。

ア 安心して暮らせる住宅

Aは、まずは住宅の確保が求められていると語った。Eは身近で「どこに住めばいいのだろう、教えてほしい」という避難者の声を聞いた。避難者が独力で住宅を探すのではなく、斡旋などが必要であると語った。借上げ住宅は、自分の家であるという実感が持てないため、安心して生活することができない。震災以前の自宅に比べると部屋が狭く、荷物が多い中で小さくなって生活をしているという。Eの一番大きな課題は家を買うことであり、子どもたちが安心して帰省できる家を求

めている。自分で家を探すことの大変さ、家を探すことへの支援不足が浮かび上がった。

イ かけがえのない医療

Bは、お年寄りの場合、病院への足が必要であることを語った。Cは求める支援にはきりがなしとしつつ、医療関係は大事であることを語った。

ウ 話し相手がいること

Bは話を聴いてくれる人、相談できる人が身近にいたことが大きいと語った。Dも話し相手が一番大切であり、話す人がいないとストレスが溜まってしまうという。Bはふるさととの連絡網が必要であるため、社会福祉協議会の人に話を聴きに来てほしいと言う。Eは家にいると話し相手がいな生活になるため、同じ境遇の人と会話ができるサロンへ出掛けようとしている。Aは避難先の人との交流よりも、1年に1度あるふるさと浪江町の隣組の親睦会を大切にしている。

避難者にとっては、生活の基盤となる住宅の確保だけではなく、孤立することを回避するために人との繋がりを持ち続けることが重要である。

(3) 避難先の周りの人に望むこと

ア 避難先での心無い言動―差別と排除の体験―

避難先で自分を含めた避難者が周りの人から心無い言動を受けて傷つく現実、3-(2)で述べたが、ここでも類似の体験が語られた。具体的には、Aは避難先で近隣住民に挨拶をして無視された。また「賠償金をもらって医療費も免除でしょう」「賠償金をもらって優雅な生活をしているんだ」と言われたこともあった。避難先の茨城県でコンビニに行った際には、客が立ち止まり、車のナンバーを見た後に「えっ、ナンバーいわきだよ」とも言われた。他県に転居したAの友人は地域の人との付き合いがない。Aは避難先の人々は、避難する人々の同化を拒むと述べた。

Dは、福島から避難してきたと知られると、よそ者扱いされてしまうと語った。また、Dの友人は「放射能がうつる」と言われたという。Dは、

優しく接してもらえるのが一番だが、なかなかそうはいかないと語った。

Eからは避難先の人とは分かり合えないという言葉があった。Cは理解してくれるように求めている仕方がないと語った。

Aの友人は福島県内の避難先で店を開いたが「邪魔者が来た」というようなことを言われたという。

避難者には、周囲から傷つけられることへの警戒心がある。それは傷つけられた経験が少なくないからである。Eは探りを入れられて傷つけられることへの苦痛から、話す内容の線引きを行う。

福島県内でも避難者への差別は存在する。

イ 普通の関係・暮らしを望む

A、B、C、Eから頻出した言葉は「普通」であった。Aは、色眼鏡ではなく「普通」に自分たちを見て「普通」の関係を築いてほしいと語った。Bは「普通」でいい、Cは「普通」に接してくれればいいと語り、Eは「普通」でいい、それだけで充分であるという。

ウ 近隣住民より遥かに親切な店長と店員

Aは避難先の近隣住民との付き合いがなく、スーパー等の店長や店員と仲良くなるしかないと言った。店長らは、親しくなるにつれて買い物の時に話しかけてくれたり妻の具合を気遣ってくれた。Aにとって、自分のことを気にかけてくれる人との会話は短い時間であっても幸福である。

7 原発事故について

A～Eは、原発や原発事故について、実際に事故を体験した人ならではの切実な思いを語った。全員に共通するのは原発に反対という思いである(紙幅の関係から、詳細を省略する)。

8 避難者にとってのふるさとについて

(1) 離れがたいふるさと

Aは68年間住んだ浪江町は自分を育ててくれた

大事な町であり、その大事な町を自分で捨てたわけではなく、持っていかれたのだと語った。浪江町への思いは語り尽くすことができない。Bには生まれ育った浪江町への懐かしさがある。車を買った際に、購入先の地域のナンバーではなくいわきナンバーを希望した。浪江町を忘れたくないという思いからである。Cは、浪江町はいい所であり、住んでいた地域もいい所であったと語った。Dは、楡葉町は安心できる場所で、避難生活中は毎日のように帰りたいと思っていた。Eは、自分のふるさとの喪失は信じられないことであると語った。「ただいま」と言って帰る場所を無くした悲しみや辛さがある。浪江町では墓じまいをする人が多くなっているが、Aは同町にずっと墓を置いておくという。この発言は、生まれ故郷との縁は死んでも切れない、自分も死んだら浪江町の墓に入るという気持ちからである。

避難者はふるさとへの大切な思いを抱えている。その思いは避難後も変わることはない。

(2) 有り難いふるさと

Aは避難生活により一度商売が駄目になった時期があったが、客と仕入れ先は1人も離れなかった。この出来事は、浪江町で生きてきて間違っていなかった証と思え、その人たちとの繋がりは死ぬまで持っていくと語る。Bは、ふるさとで震災以前は理容師をしていたが、避難先では商売ができず、理容師をできないことが今一番辛く寂しいことだと語った。商売をする者にとって、ふるさとで常連を対象に商売をする機会が奪われることはやりきれない。Bは浪江町で出会った稽古事の友人がいるため助けられている。Dは友人がいる楡葉町に早く帰りたいと思っていた。ふるさとには、かけがえのない大切な人との繋がりがあった。

(3) やりきれないふるさと

Bは変貌した浪江町の風景に寂しさを感じ、Cは浪江町に住めなくなった悲しさを抱えていた。Eは自分の中でふるさとに住めないことにけじめ

がつけられていない。

(4) 避難者以外の人にとってのふるさと

Aは娘たちから「お父さん、私たちだって被害者だよ」との言葉を受けた。この発言から、ふるさとを失い被害を受けた人は避難者だけではないことが理解できる。別の土地で暮らす親族や知人にとっても大切なふるさとが奪われたのである。

以上のインタビュー結果の分析から、原発事故避難指示が避難者に与えた影響を図に示す。



図 原発事故避難指示が避難者に与えた影響

9 これからの人生—それでも生きていく—

離れがたい、有り難い、やりきれないふるさとを失ってしまったが、それでも避難者たちは生きていかなければならない。Cは何とかなるという気持ちで前向きに考えるようにしている。Dは落ち込んではいられない、愚痴を言わずに前向きに考えるようにしている。Eは無理にでも避難先をふるさとにしないと自分が浮いてしまうという。過去を忘れるはしないが、先のことを考えていかなければならない、振り向いてもどうしようもないと語った。Aは最近涙もろくなったが、子どもたちの前では涙は絶対に見せない。Dは、ふるさと

が明るい町になることを願っていると語った。

避難者は、受け入れがたい現実とこれから先の人生の間で複雑な思いを抱えている。

V 考察

1 突然奪われたふるさと

ある日突然ふるさとを奪われるとはどういうことなのか。ふるさととは、生まれ育った場所だけを指すわけではない。ふるさとには一人ひとりの大切な思いが込められている。避難者は、大切な思いが込められた家も、自分が築き上げてきた土地での人間関係も、人生も、多くのものを突然失ったのである。

2 傷つけられる避難者

避難者は心無い言動に傷つけられていること、それは福島県の内か外かを問わないことが明らかとなった。避難者の置かれている現状を理解せずに批判的な言葉を投げつけることは、苦しんでいる避難者を一層追いつめる。

本研究では、避難者が賠償金をもらったことへの心無い言葉をかけられた事例を分析したが、賠償金をもらったからといって、ふるさとで過ごせたであろう、かけがえのない時間や人との繋がり、仕事や日常生活などを取り戻すことはできない。また、町ごとや同じ町内でも賠償金の額は異なる。その金額の差が避難者間の不平感を生んでいるという現実もある。避難者を一括りにして論じることができないのと同じように、賠償金とその金額が避難者に与える影響も一括りにすることはできない。

3 避難者が望む「普通」

避難者は「普通」に接してほしいと思っている。「普通」という言葉が出てきたのは、これまで避難先で「普通」に接してもらったことが難しく、自身や周りの避難者が辛い思いをしてきたという実

体験があったからである。

実際に人は、避難者自身を知る前に、避難者であるというだけで偏見や負の先入観を持ち、濁った目で避難者を見て接してしまう。濁りのない目で避難者を見ること、接することが重要である。

4 避難者自身の体験の意味付け

避難生活を送ることになり、避難中に優しく接してくれた人への感謝の意味で、Bは「いい人生経験である」と語った。また、Eは避難生活を送ったことで「人生が、ちょっと視野が広まった」という。

このような言葉の背景には、複雑な思いや矛盾の束を抱えながらも、それでも生きていかなければならないと、自らを意識的に前へ向かせようとする意志があるのではないだろうか。避難者は、前を向いたり、後ろに引き戻されたりしながら生きていると考えられる。

5 私たちの省察

福島県外に住む人々は、原発事故というと福島県の事故として一括りにして捉えてしまうところがある。しかし、地域によって避難指示の内容は異なる。また、避難指示が解除になったからといって全員が帰郷できるわけではない。放射能への不安や、それぞれの事情がある。一人ひとり抱えている問題は異なり、解決へ向けて進むスピードも異なる。だからこそ、避難者を一括りにして見てしまわないように気をつけなければならない。

避難者の本当の苦しみや悲しみを理解することは容易ではなく、差別や偏見を完全になくすことは難しい。無理解で残酷な言葉によって傷つく避難者を減らすためには、避難者の置かれている現状を正しく把握し、避難者自身を理解することが必要であると考え。それは私たち自身への省察があってこそ可能となる。

Ⅵ 展望

今回のインタビュー調査は高齢者層の人々を対象におこなったが、今後は幅広い年齢層から避難の体験を多角的に問うていきたい。また、差別や偏見をなくしていくために、避難者以外の人々の原発事故や避難者に対する意識がどのようなものであるかについても探っていきたい。

Ⅶ 参考文献

- ・石川和信 福島第一原発事故6年後の被災高齢者の現状と問題点 日本老年医学会雑誌 54巻 2号 p.129-135 2017
- ・衛藤英達 統計と地図でみる東日本大震災被災市町村の姿 日本統計協会 2012
- ・川喜田二郎 発想法 改版 創造性開発のために 中央公論新社 2018
- ・原発災害・避難年表 編集委員会 原発災害・避難年表 図表と年表で知る福島原発震災からの道 すいれん舎 2018
- ・辻内琢也他 福島県内仮設住宅居住者にみられる高い心的外傷後ストレス症状—原子力発電所事故がもたらした身体・心理・社会的影響— 心身医学 56巻7号 p.723-736 2016
- ・福島県ホームページ ふくしま復興ステーション www.pref.fukushima.lg.jp
- ・除本理史他 福島原発事故による避難住民の被害実態—福島県浪江町からの避難者に対する聞き取り調査にもとづいて— 人間と環境 38巻 2号 p.2-9 2012